

36	徳島県立海部高等学校	全日制	普通科	26～28
----	------------	-----	-----	-------

平成27年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育

研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障がいのある生徒の自立と社会参加を図るため、特別支援学校や発達障がい者総合支援センター等の関係機関と連携し、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び得意分野を伸ばす指導及び就業体験等の実施による進路支援の充実に関する研究。

2 研究の概要

対象となる生徒は、周囲とのコミュニケーション等対人関係の困難さを示すことから、自立活動領域の「人間関係の形成」や「コミュニケーション」「心理的安定」に重点をおいた内容を中心に、2単位時間（年間70時間）を新たな教育課程として編成した。その際、個々の生徒については、特別支援学校、発達障がい者総合支援センター等の協力を得ながら、個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成し、それに基づく指導や評価方法について研究していった。また、学習場面において複数の指示を聞くことが難しく、周囲の状況把握に困難を示す生徒に対しては、一斉授業での板書や指示の工夫を行うとともに、特別支援教育指導補助員による個別支援等を行い、教科指導をとおして能力を伸ばす指導を実施した。さらに、関係機関と連携し、将来を見据えた就業体験等を実施し、社会性を育むことで、適切な自立や就労支援方法について研究を実施した。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

本校は、徳島県南部の高校で、普通科、情報ビジネス科、数理科学科を持ち、1学年の生徒数が約140名、総生徒数400名あまりの中規模校である。普通科のある高校が周辺にはないため、地元の生徒のほとんどが本校に進学する。そのため、毎年、生徒の学力には大きな差があり、特別な支援を必要とする生徒が各学年に複数名在籍している状況が見られる。

生徒の中には、障がい等の特性のため、対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も未熟なため、集団に溶け込めずに自尊感情が低下したり、通常の一斉指導に適応できず、学力不振に陥ったりする生徒もいた。また、生活体験が乏しく、消極的な生徒が多かった。いずれも従来の教育課程や教育方法では、本来持っている能力を十分に発揮できないことから、障がい特性に応じた教育課程の見直しによる、個別指導や小集団でのコミュニケーションスキルの獲得、学び直しによる基礎学力の向上、一斉指導の中での個々の能力や特性に応じた支援の充実等、生徒に応じた教育環境の整備を図るこ

とが喫緊の課題となった。

本年度行った生徒の実態調査でも、友人関係の持ち方が苦手な孤立しやすい生徒や他者とのコミュニケーションが上手いかず、ストレスを抱えたり、トラブルにつながったりするといった「社会性」に関する部分や、学習に関しては、読み飛ばしや読み間違いが多く、板書を写すのに極端に時間がかかったり、一度に複数の指示が聞き取れず、混乱したりするといった「読む」「書く」「聞く」といったスキルに関する部分が生徒の課題として挙がってきた。これらを踏まえ、特別支援学校の自立活動の領域の中で、特に「人間関係の形成」「コミュニケーション」「心理的な安定」に重点をおき、個々の生徒の特性等に応じた学習支援や生活支援を行うことで、生徒の学習上又は生活上の困難の改善や克服をめざすとともに個々の能力・才能を伸ばし、将来の自立と社会参加へつなげることを研究の目的とした。

(2) 研究仮説

障がい等の特性のため、対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も乏しく、集団に溶け込めずに自尊感情が低下し、本来の能力が発揮できない生徒に対して、新たな教育課程の中に、特別支援学校の自立活動領域の区分である「コミュニケーション」「人間関係の形成」及び「心理的な安定」に重点をおいた「キャリアデザイン」を、2単位時間設定することで、支援生徒が本来持っている能力を発揮し、学力だけでなく社会性やコミュニケーション能力を向上させることを期待した。

また、「キャリアデザイン」を週時程内に1単位時間、週時程外に1単位時間設定し、週時程外の1単位時間については、長期休業中に就業体験や模擬面接会等を半日から1日単位で実施することにより、体験的な学びの場の中で、将来の社会生活や職業人として必要な社会性やコミュニケーションスキルを身につけることをめざした。そして、今まで十分でなかった学習についても「キャリアデザイン」等の指導と関連づけて、丁寧に聞き取ったり、自分の言葉で発言する機会を多く持ったりすることにより、基礎的な学力が向上し、自信を持って学校生活を送ることができるようになることを期待した。

(3) 教育課程の特例

- ・授業時数の変更の程度……2学年で2単位時間の増加（年間31単位＋2単位）
3学年で2単位時間の増加（年間31単位＋2単位）
- ・この授業については、希望者が選択できるように授業時間は他の授業が終わった時間帯（つまり他の生徒が6時間授業の場合、7時間目に設定する）とした。

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
<p>・新たな教育課程として、2年次で「キャリアデザインA」を、3年次で「キャリアデザインB」の授業を設定した。</p> <p>・本校で特別な支援を必要とする生徒の多くが、コミュニケーションを取ること</p>	<p>・「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の主な指導内容については、次のとおり。</p> <p>「キャリアデザインA」</p> <p>・他者紹介</p> <p>・ビジネスマナーを学ぼう</p> <p>・事業所見学に行こう</p>	<p>・2年次……2単位 （年間70時間）</p> <p>・3年次……2単位 （年間70時間）</p> <p>・週時程の授業は1単位時間。残りは週時程外として、長期休業中に事業所見学や就業体</p>

<p>や人前で話すことが苦手であり、生活体験が少なく、社会に出るにあたって不安を抱えている。また、就職を希望する生徒が多かった。そこで、「自立活動」領域の6区分の中から「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」の内容を中心に、将来の社会的自立や就労に備えた実践を取り入れた学習を行った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション力を磨こう ・就業体験に行こう ・自己アピールしよう 「キャリアデザインB」 ・自分を知る ・ビジネスマナーを学ぼう ・履歴書を書こう ・就業体験に行こう ・社会人になる準備をしよう ・後輩へ語る自分の就活体験 ・10年後の自分へ 	<p>験、模擬面接会等の体験的な活動を実施することとした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選択制のため、受講生は、他の生徒より学年で2単位増となる。
--	---	--

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

障がい等の特性のために、通常の一斉指導に適応できず、学力不振に陥る生徒については、生徒の特性を全ての教員が共通理解し、生徒の苦手さや特性に応じた対応ができるようにしていった。そのため、これまでも実施してきた学校生活チェックシートによる実態把握に加え、生活経験を問うアンケート等も実施し、学習指導方法の見直しに活用した。例えば、書くことに苦手さを感じている生徒に対しては、授業で使用するワークシート等を工夫した。視覚的提示が記憶に残りやすい生徒に対しては、その特性に合わせて、板書の仕方や指示の出し方を工夫した。

また、支援の必要な生徒の在籍する学級での一斉授業に際しては、特別支援教育指導補助員を配置することで、教員の指示伝達やノートテイク等の支援を行った。配置も2年目となり、生徒達も特別支援教育指導補助員の存在に慣れ、自分から質問したり、支援を求めたりする様子も見られるようになった。それに加え、担当教員が、生徒が自分で動くことのできるような指示の出し方や、教室環境の設定等を工夫する等、ユニバーサルデザインを積極的に取り入れて授業を行うようにした。

そして、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒に対しては、一斉授業の中でペアワークやグループ学習を取り入れ、他者と関わり意見を述べ合う場を設定したり、調べたことを他の生徒の前でプレゼンテーションしたりすることで、普段の学習の中でも有効な人間関係を築き、コミュニケーション能力や社会性の向上をめざした。

生徒の個性を伸ばす指導については、「キャリアデザイン」の授業で導入しているタブレット端末の活用について、まず教員研修の中で、ICT関連の外部講師を招へいし、パソコンの操作やタブレット端末の授業での効果的な利用の仕方やプレゼンテーションの方法を学び、各教員が授業の中でも、ICTを活用して生徒の興味・関心を引き出していった。実際にICTを活用したプレゼンテーションを授業の中で取り入れることにより、効果的な発表方法について生徒自身が工夫する様子も多く見られ、少しずつではあるが、生徒の能力を引き出していると考えられる。

○指導方法と教材

ア 小さなホワイトボードを全員に持たせて発表等に使った。(数学、音楽)

イ 実態に合わせてヒントを出し、生徒が解決方法を発見できるようにした。(数学)

- ウ 生徒の集中を持続させるために、生徒が発表する機会を多く設けた。(数学)
- エ 板書は長文にならないようにした。(社会)
- オ 机間指導を増やし、一人一人に対応した。(社会)
- カ 生徒自身に教科書の要約をさせてプレゼンテーションをさせた。(保健)
- キ 外部機関(保健所)と連携して出前講座を実施した。(家庭科)
- ク 家庭科技術検定にチャレンジさせ、一人一人に目標を持たせた。(家庭科)
- ケ 生徒の実態に応じた自作プリントを作成した。(英語、音楽、情報)
- コ タイマーを活用した。(音楽、英語、情報)
- サ 毎時間、授業のスケジュール(流れ)と目標を提示した。(国語、情報)
- シ ファイルを活用してプリントの整理をし、ワークシートで学習の流れを把握させた。ワークシートは整理しやすいようにA4サイズに統一した。(国語)
- ス プrintは1時間に1枚で収まるようにレイアウトを工夫した。(国語)
- セ 実技では検定方式を取り入れ、1つクリア(合格)できたらシールを貼り、生徒が達成感が持てるように工夫した。(音楽)
- ソ 印の袴(カバー)を作る際、手元や手順の写真を拡大して黒板に提示するなど視覚的提示を増やした。(書道)

○授業形態

- a グループ学習(国語、数学)
- b ペア学習(英語)

(5) 研究成果の評価方法

- ・障がい等の状態に応じた特別な指導や、個々の能力・才能を伸ばす指導について、教員対象にアンケートを実施しての評価
- ・キャリアデザイン等の授業を受けた生徒への聴き取りやアンケートによる評価
- ・個別の指導計画による評価
- ・保護者へのアンケートによる評価
- ・運営指導委員による授業見学等による評価
- ・研究発表での参加者アンケートによる評価

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

「自立活動」領域の中から「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」の内容を中心に、将来の社会的自立や就労に備えた実践を取り入れ、「キャリアデザイン」の授業を新設した。2年次で「キャリアデザインA」、3年次で「キャリアデザインB」を各2単位ずつ設定し、週時程の授業は2年次が水曜日の7時間目、3年次が金曜日の7時間目に開講し、残りは週時程外として長期休業中に就業体験や模擬面接会等の体験的な活動として実施した。受講生徒は2年生が5名、3年生が18名であり、少人数でのグループ学習や個別の指導を行うため、ティームティーチングで実施した。また、選択制の為、受講生徒は他の生徒よりも各学年とも2単位増となった。

(2) 全課程の修了認定の要件

この「教育課程の特例」による「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の

授業が、他の生徒が履修する単位よりも多くなるという点、そして、内容が本人の障がい特性に応じて、将来の社会参加や自立を目的としている点などから、卒業単位に含めることは授業選択生徒にとって負担増になるということで、単位としては修得するが、卒業単位には含めないこととした。

(3) 研究の経過

	実施内容等	
第1年次	・特別な教育課程の編成準備 ・生徒の現状及び課題の把握	・校内支援体制の機能強化
第2年次	・特別な教育課程の実施 ・生徒の支援の充実	・校内支援体制の充実
第3年次	・特別な教育課程の評価・検証 ・生徒の支援の評価・検証	・校内支援体制の評価・検証

※詳細は、「平成27年度の取組」参照

(4) 評価に関する取組

	評価方法等	
第1年次	・特別な教育課程の編成準備について ・生徒の現状及び課題の把握について	・校内支援体制の機能強化について
第2年次	・特別な教育課程の実施について ・生徒の支援の充実について	・校内支援体制の充実について
第3年次	・特別な教育課程の評価・検証について ・校内支援体制の評価・検証について ・生徒の支援の評価・検証について	

※詳細は、「平成27年度の取組」参照

○平成27年度の取組

月	研究内容 (事業内容)	評価 (事業の成果)
4月	○入学生について中学校からの引継ぎと聞き取り調査を行い、職員会議で共通理解を図った。 ○キャリアデザインの授業開始 ・自己紹介 (キャリアデザインA・B) ・おじぎ、挨拶 (キャリアデザインB)	○事前に中学校からの引継ぎや保護者・本人からの聞き取りを行っていたことで、教員が

	<p>・他者紹介（キャリアデザインA）</p> <p>○英語の非常勤講師が加わり、ティームティーチングや習熟度別授業を展開</p> <p>○学校生活チェックリストを全教員に配付し記入 (5月29日まで)</p>	<p>共通理解した上で入学生を迎えることができた。</p> <p>○おじぎ等は練習を重ねてできるようになってきた。</p> <p>○全教員が実態把握ができた。</p>
5月	<p>○PTA総会 保護者向けリーフレット作成→配付（9日）</p> <p>○特別支援教育指導補助員が授業に加わり、支援の必要な生徒の指導にあたった。</p> <p>○教育相談学年部会で支援の必要な生徒の情報交換及び共通理解を図った。（13日）</p> <p>○学校生活チェックリストの整理とまとめ</p> <p>○キャリアデザイン外部講師招へい授業（27日） 「ビジネス電話マナー①」 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 萩答院 千秋 氏</p>	<p>○PTA総会での説明により本校の特別支援教育について保護者への理解啓発ができた。</p> <p>○ビジネスマナーの敬語や電話の学習では外部講師の活用により実践的な学習ができた。</p>
6月	<p>○キャリアデザイン外部講師招へい授業（3日） 「ビジネス電話マナー②」 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 萩答院 千秋 氏</p> <p>○第1回運営指導委員会（29日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態について ・キャリアデザイン授業について ・今後の取組みについて 等 	<p>○電話の実践練習では何度も繰り返し行うことで少しずつできるようになってきた。</p> <p>○運営指導委員会で生徒の実態と計画についてご意見をいただいた。</p>
7月	<p>○教員研修（6日） 「高等学校の授業におけるICTの活用の仕方 ～特別支援教育の視点から～」 講師：四国大学生生活科学部児童学科 准教授 前田 宏治 氏</p> <p>○生徒・保護者へ来年度の教育課程（キャリアデザイン）について説明を行った。</p> <p>○キャリアデザインB「職場見学」（介護施設） (10日、14日)</p> <p>○第1回就職対策講座（3年生就職希望者対象）（30日） 講師：テルウェル西日本チーフインストラクター 萩答院 千秋 氏</p> <p>○キャリアデザインB「職場見学報告会」</p>	<p>○教員研修では授業でのICTの活用について教員の関心が高まった。</p> <p>○職場見学や面接対策講座により就職試験に向けての意欲が高まり、職場見学報告会では、生徒が自分の課題を意識するきっかけとなった。</p>
8月	<p>○キャリアデザインA「職場体験」（26日）</p> <p>○第2回就職対策講座（普通科3年生就職希望者対象） (28日)</p>	<p>○職場体験では働くことの厳しさや充実感を味わうこ</p>

	<p>講師：徳島県教育委員会特別支援課 濱 紀子 指導主事</p> <p>・面接練習 → アンケート実施</p>	<p>とができた。</p> <p>○面接練習会では一人一人の課題に沿って練習を行うことができた。</p>
9月	<p>○キャリアデザインA「職場体験報告会」(2日)</p> <p>○キャリアデザインB「面接練習」</p>	<p>○職場体験報告会では発表時の自分の癖や改善点に気づくことができた。</p>
10月	<p>○社会性スキルアンケート実施(生徒・保護者)</p> <p>○子どもの生活に関する実態調査実施(生徒)</p> <p>○キャリアデザインA「ストレスマネジメントについて」</p> <p>○キャリアデザインB「上手な頼み方や断り方について」</p> <p>○キャリアデザインB 「タブレット端末を使って目的地に行く手段を調べよう」 → 発表</p> <p>○キャリアデザインの授業の中で、社会に必要な漢字や時間・数量など基礎的学習開始</p> <p>○先進校視察(19日、20日) ・京都光華高等学校 ・京都府立朱雀高等学校 ・滋賀県立愛知高等学校</p>	<p>○社会性スキルアンケートでは学校では見えない実態や保護者のニーズを把握できた。</p> <p>○キャリアデザインBでは卒業後に不安なことについてロールプレイングやグループ活動等をとおして学び、コミュニケーション能力を高めることができた。</p>
11月	<p>○キャリアデザインA 「ストレスマネジメントについて」(ロールプレイング)</p> <p>○キャリアデザインB「お茶の入れ方と出し方」</p> <p>○キャリアデザインB 「タブレット端末を使って、社会で必要なスキルを調べてみよう」</p> <p>・接客と訪問の仕方・仕事の基本・お金の使い方について</p> <p>○校内就労体験の準備</p> <p>○巡回相談員授業見学(11日) 阿南支援学校ひわさ分校 日下 みゆき 教諭</p> <p>○第2回運営指導委員会(13日)</p> <p>・夏休みの授業について・アンケートについて ・今後の取組について ・高校生活支援カードについて</p>	<p>○タブレット端末を使っての活動では生徒が積極的に取り組むことができた。</p> <p>○運営指導委員による授業参観も行い、支援の必要な生徒について適切な授業展開や支援がなされているか、評価を行った。</p>
12月	<p>○第2回教員研修「事例検討会」(7日)</p> <p>○徳島県発達障がい教育研究会 (今年度のキャリアデザイン授業について発表) (17日)</p>	<p>○教員研修では、支援対象生徒に対する一斉授業等での指導・支援の留意点の確認ができた。</p>

	<p>○キャリアデザイン外部講師招へい授業（10日） 「ストレスマネジメントについて」 講師：南部こども女性相談センター 臨床心理士 梅崎 一郎 氏</p> <p>○1年生「総合的な学習の時間」での「人間関係づくり」 ワークショップの実施</p> <p>○キャリアデザインA「校外・校内就労体験」（24日） ○キャリアデザインB「1年間の総まとめ『1日研修』」（25日）</p>	<p>○県内外の教員約70名が参加した発達障がい教育研究会において本事業について発表を行い、ご意見やご助言をいただいた。</p> <p>○1年生の「総合的な学習の時間」を活用したことで心地よい人間関係について考える機会となった。</p> <p>○ストレスマネジメントでは日頃気づかないストレスとつきあう方法を学ぶことができた。</p> <p>○校内・校外就労体験等では各自が夏休みの反省を意識しながら活動したり、自分の成長を振り返ったりすることができた。</p>
1月	<p>○キャリアデザインA 「校内就労体験を振り返って」発表準備</p> <p>○キャリアデザインA・B 「社会人として必要なスキルについて」</p> <p>○キャリアデザインB「今年度の授業を振り返って」</p> <p>○キャリアデザインB「学習成果発表会」（27日）</p>	<p>○学習成果発表会ではグループでプレゼンテーションを行った。準備や片付けを含め全員で協力して発表会を運営し、来年度のキャリアデザイン受講予定者や先生方の前で堂々と発表できた。</p>
2月	<p>○キャリアデザインA 「校内・校外就労体験報告会」と振り返り（10日）</p> <p>○キャリアデザインA「1年間を振り返って」</p> <p>○文部科学省研究協議会（15日）</p>	<p>○就労体験報告会では自分の反省点や課題を明確に話せており、夏の報告会より全員が評価点数が上がった。</p>
3月	○第3回運営指導委員会（15日）	○運営指導委員会

- 入学予定者のいる中学校への引継ぎ依頼と引継ぎの実施
- 入学説明会で「高校生活サポートカード」配付、説明

では今年度の事業全体の評価と、入学者の実態把握方法等について検討を行った。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①対象生徒への効果

キャリアデザインの授業はみんながゼロからのスタートで、劣等感を持たずに生き生きと活動することができた。普段の一斉授業では十分に学ぶことができないおじぎ・挨拶・電話等の学習ができ、最初は上手くできなかつたことも練習を重ねるごとに自信を持ってできるようになった。練習すればできるという自信が得られたことは大きな成果だった。また体験的な活動の時間を多く取り入れることで、一人一人の課題が次々に見つかり、個々の実態に応じた学習ができた。不安に思っていた就職面接では、各自が自分の課題を自覚し、それに伴って実施した具体的な練習の成果が表れ、全員が進路を決定することができた。人との関わり方においても、しゃべり過ぎる生徒とおとなしすぎる生徒が混在し、今まで同じクラスでも話したことがなかつた者同士がほとんどであったが、グループ活動や職場見学で一緒に活動を重ねることで、仲間として自然に関わることができるようになった。また、社会経験が乏しく自立への不安感が強い生徒も多かつたので、各自の実態に合わせて自立活動の内容を工夫することで社会性も向上した。

②教員への効果

教員全体の特別支援教育への関心は年々高まってきている。「学校生活チェックシート」の回収率も、昨年の32.5%から63.4%まで上昇した。教員研修においては、教員から実施してほしい研修の内容についてアンケートをとり、そのニーズを踏まえて、1回目は、高等学校でのICTを使った授業法について、2回目が事例検討会についての研修を実施することができた。また、発達障がいやユニバーサルデザインを取り入れた授業に関する書籍を職員室の新聞コーナーに置いておくようにしたことで、教員が手取りやすくなり、自立活動を担当する教員にも、適切な指導方法等について質問をする教員も増えてきた。

また、キャリアデザインの授業についても、職場体験報告会や模擬面接会等、担当する教員だけでなく、担任や教頭、校長も参観することが多かつた。そこで目にする生徒の様子は新鮮で、多くの教員にとって生徒の実態を知る貴重な気づきとなった。個々の生徒の課題を共通理解し、支援の必要性を実感することとなった。

③保護者等への効果

(保護者)

支援ニーズの高い生徒へキャリアデザインの受講を勧めると、生徒本人よりも保護者の反応が良い場合があつた。また、今年度、受講している生徒の保護者の中から「キャリアデザインの授業でいろいろなことを体験させてもらってありがたい」という声も多かつた。加えて、社会性スキルアンケート(保護者向け)を実施し、自分の子供のできることやできないこと、できるようになって欲しいことを記入してもらつたところ、具

体的に記入されており、保護者からのニーズも知ることができた。また、保護者自身も自分の子供の苦手なことや得意なことを意識でき、「社会人になるにあたってできなくて困ることが多い」と、家庭での生活を見直すきっかけになったようである。

(他の生徒)

今年度のキャリアデザインで実施した授業内容や、就職内定の成果を受講している生徒から聞き、2年生に関しては、昨年度受講を希望しなかった生徒が来年度は受講を希望している。来年度の受講者はキャリアデザインAが7名、キャリアデザインBが12名である。補習の時間帯に行っていることもあり、他の生徒も「キャリアデザイン」は、「将来に向けて苦手なことを克服するための場」だと認識しているようである。

(その他(地域の理解等))

地域の事業所には職場体験等で協力して頂いた。生徒それぞれの住居に近い事業所で職場体験等を実施できたおかげで、学校と地域との結びつきも深まった。ある事業者の方からは「高校でも特別支援教育をしてくださるのですね」という言葉が聞かれるなど、地域の方が高等学校での特別支援教育の必要性を感じていただいたり、関心を持ってくださったりすることは生徒たちの励みになった。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①問題点・課題

- ・支援ニーズの高い生徒に受講を勧めたが、進学を希望するため進学補習を受講したり、本人及び保護者の理解が得られず、受講してもらえなかったりする場合もあった。
- ・就職課や人権教育課、受講生徒の担任とは連携しながら「キャリアデザイン」の授業や本事業をすすめることができたが、それ以外の教員と連携が難しかった。
- ・1年生の「総合的な学習の時間」でも「人間関係づくり」などの授業を行ったが、十分な時間の確保が難しかった。
- ・活動の中で数学(パーセントの計算)や国語(お礼状などで使う漢字)などの修得が十分でない生徒が見られ、早い段階から基礎学力指導に取り組むべきであった。
- ・少人数のグループ活動によりコミュニケーション面の力は向上したが、それぞれの課題に向き合い、障がい特性も含めての自己理解につなげるためには、もっと個々の生徒の活動を増やすべきである。

②解決策

- ・多くの保護者にも特別支援教育についての理解を深めてもらえるよう、来年度は保護者対象の特別支援教育の講演会等を企画するとともに、キャリアデザインの授業で学んだ内容について、家庭にお知らせし、家庭でもソーシャルスキル等の必要性を話し合ったり、練習してもらったりして家庭と連携しながら学びを充実させていきたい。また、新入生に対しては「高校生活サポートカード」を配付し、記入してもらったことについて面談等で保護者と具体的に連携をはかっていく。
- ・担当者だけが行うのではなく、他の教科の授業でも自立活動の内容(姿勢・おじぎ・挨拶・返事)を取り入れて、学校全体で生徒の自立に向けて取り組んでいきたい。
- ・1年生の「総合的な学習の時間」に「人間関係づくり」「コミュニケーション」等の活動を計画的に取り入れられるよう学級・学年等の活動形態を工夫したい。

- ・基礎学力の見直しとともに、生徒の不安に思っていることについて早めにアンケートをとって、授業計画に生かしたい。
- ・生徒の苦手意識の背景に何があるのか、障がい特性からくるのか、経験不足からくることなのかを明確にするためにも、個別面談の機会を取り入れたり、保護者の了解があれば検査等も実施したりして、適切な支援の手立てを探っていきたい。

※ 徳島県では、「障害」を「障がい」と表記。